

令和 4 年 5 月 8 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02812

研究課題名(和文) 英語心理動詞の発達に関する史的統語論研究：項の具現化と文法化の観点から

研究課題名(英文) A Syntactic Study on the Diachronic Development of English Psych-Verbs: With Special Reference to Argument Realization and Grammaticalization

研究代表者

縄田 裕幸 (Nawata, Hiroyuki)

島根大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：00325036

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、英語史においてなぜ心理動詞を用いた非人称構文が消失したのか、そしてなぜ一部の心理動詞が他の動詞に比べてV not型の否定文語順を長く保持したのかを明らかにした。非人称構文の消失に関しては、英語の談話階層型言語から主語卓越型言語へと変化し、主語位置が節構造上で下方推移したことが原因で消失したことを解明した。またV not型語順の保持に関しては、know類動詞が文法化によって軽動詞として再分析されたことによってもたらされたと論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的な意義として、まず初期近代英語で奇態格心理動詞が消失した過程や後期近代英語でknow類動詞が動詞移動の消失に抵抗したさまをコーパス調査によって明らかにし、英語の歴史の解明に貢献できた点が挙げられる。また理論的意義として、これまで生成文法理論の共時的研究で蓄積された研究成果を通時的変化の分析に応用できることが示された。このような英語史の理論的研究によって現代英語がなぜ今のような姿になったのかより深く理解できるようになり、言語教育にも改善をもたらすことが期待される。

研究成果の概要(英文)：This project has revealed why impersonal constructions with psych-verbs were lost, and why some psych-verbs retained "V-not" negative word order longer than other verbs in the history of English. As for the loss of impersonal constructions, we maintained that it was caused by the typological change of English from a discourse configurational language to a subject prominent language and a concomitant downward shift of subject positions in the clause spine. With respect to the retention of the "V not" word order, we claimed that it was brought about because know-class verbs were reanalyzed as light verbs through grammaticalization.

研究分野：英語学・言語学

キーワード：英語史 生成文法 心理動詞 非人称構文 動詞移動 文法化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

1980年代に原理・パラメータ理論が提唱されて以来、心理動詞に関する研究は生成文法理論の発展に大きく寄与してきた。さまざまな言語からの経験的データが蓄積されることにより、たとえばVP構造の精緻化につながったり、束縛現象の理解が進んだりした(Belletti and Rizzi (1988), Landau (2010)など)。しかし、当時はこれら通言語的研究の成果が史的統語論に適用されることはほとんどなかった。これは2000年代までは心理動詞の通時的变化に関する経験的データの蓄積が十分ではなかったためである。

2010年代になると、英語史分野で Möhlig-Falke, Ruth (2012) *The Early English Impersonal Constructions*, OUP や Muira, Ayumi (2015) *Middle English Verbs of Emotion and Impersonal Constructions*, OUP など、英語の心理動詞やそれらを用いた非人称構文の発達にかかわる重要な研究が相次いで出版された。これら文献学的研究によって古英語・中英語の心理動詞の実態が明らかになってきたが、非人称心理動詞構文の消失に関する理論的説明は未だ十分になされていなかった【論点㊸】。また近代英語に目を移すと、心理動詞の一部 (know, doubt, need, dare など) は否定文における do 挿入に抵抗するという特異な振る舞いをするということが知られているが、このことが心理動詞の特性として分析されることはなかった【論点㊹】。

2. 研究の目的

本研究では上記2つの論点を中心に生成統語論の枠組みを用いて英語史における心理動詞の分析を行うことで、中英語から近代英語にかけて心理動詞がどのように発達したかを明らかにするとともに、言語理論の発展に貢献することを目指した。初期英語の心理動詞に関する関心が高まりつつある現在の英語史研究の状況で、意義のある研究課題であると思われる。

3. 研究の方法

上述の2つの論点に関してそれぞれ以下のような仮説を立てた。本研究の具体的目標は、これらの仮説の妥当性を検証することである。

【論点㊸】に関して：中英語における非人称心理構文は、目的語経験者動詞の外項（原因項）が音声的に発音されない空項として具現化したものである。【仮説㊸】

【論点㊹】に関して：近代英語における V not 型の否定文は、心理動詞が文法化を経て軽動詞 (light verb) として用いられたことから生じた。【仮説㊹】

研究代表者はこれまで、古英語・中英語のいわゆる空主語構文についていくつかの研究を行ってきた。【仮説㊸】はその成果に基づいて着想したものである。また、【仮説㊹】は Hopper and Traugott (2003) などの文法化理論、ならびに研究代表者の関連する文法化に関する論考に基づいている。

上記の背景とこれまでの研究成果をもとに、本研究では【仮説㊸】と【仮説㊹】に関して以下の下位目標を設定した。

【仮説㊸】に関して：

- (I) 中英語の非人称心理構文が、現代語の目的語経験者心理動詞と同じ特性を持っていたことを明らかにする。
- (II) 中英語の非人称心理動詞が、同じ時期のいわゆる空主語構文と同じ特性を持っていたことを明らかにする。

【仮説㊹】に関して：

- (III) 初期近代英語から後期近代英語にかけて、どのような種類の心理動詞がどの程度 V not 型語順を示したかを記述的に明らかにする。
- (IV) 文法化理論の観点から V not 型語順を示した動詞とそうでない動詞の間にどのような相違があったのかを明らかにする。

これらの目標を達するために、本研究では Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English などの既存の各種通時的電子コーパスを利用したほか、必要に応じて一次文献にもあたって分析のための資料として用いた。また、分析の結果を英語の関連する構文や他の言語（日本語）にも応用して、その妥当性を検証した。

4. 研究成果

上記の2つの論点（非人称心理動詞構文の消失，否定文における心理動詞の do 挿入への抵抗）に分けて本研究の成果を述べる。

4.1 非人称心理動詞構文の消失

本研究では，まず Möhlig-Falke (2012), Miura (2015), およびコーパス調査に基づいて奇態格経験者主語構文(Quirky-Experiencer Subject Construction: QESC)の消失過程を記述した。QESC には原因項が主語となる使役構文との交替を示すタイプ（使役的 QESC）とそのような交替を示さないタイプ（非使役的 QESC）があり，前者の方が後者よりも早く消失した。これら2つの構文の消失時期は図1のように示される。

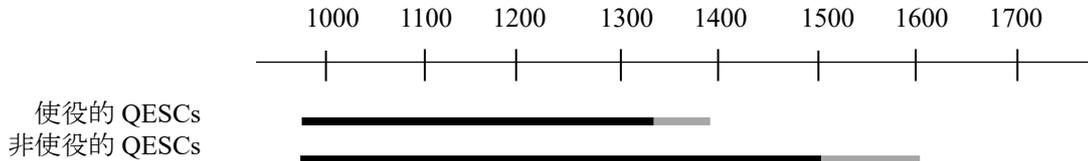


図1：使役的 QESC と非使役的 QESC の消失時期

また，使役的心理動詞が図2のような vP 構造を持つのに対し，非使役的心理動詞が図3のような VP 構造を持つと提案した。図2では原因項か T/SM 項のどちらか一方が発音される。

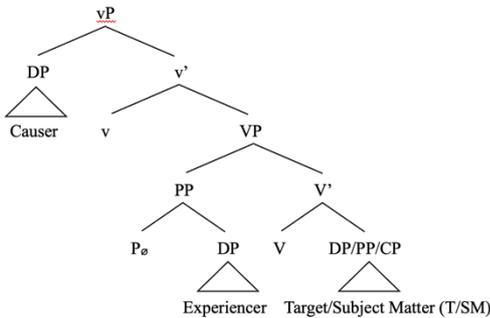


図2：使役的心理動詞の動詞句構造

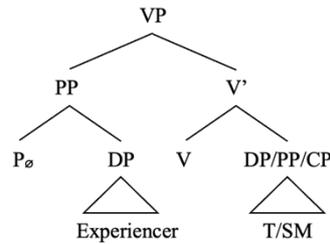


図3：非使役的心理動詞の動詞句構造

さらに，Nawata (2009)を援用して古英語から初期近代英語にかけて主語位置と一致・時制素性が下のように推移したと仮定した（四角で囲った範疇は義務的に投射される）。

ステージ1（古英語-初期中英語）：

$[[\text{TopP}] \text{Subj. Top}_{[\text{num}]} [\text{FinP}] \text{Subj. Fin}_{[\text{per}]} [\text{TP}] \text{T}_{[\text{tense}]} \text{vP}]]$ （機能的に分化した2つの主語位置）

ステージ2（後期中英語-初期近代英語）

$[[\text{TopP}] \text{Top} [\text{FinP}] \text{Subj. Fin}_{[\text{num, per}]} [\text{TP}] \text{Subj. T}_{[\text{tense}]} \text{vP}]]$ （機能的に等価な2つの主語位置）

ステージ3（初期近代英語以降）

$[[\text{TopP}] \text{Top} [\text{FinP}] \text{Fin} [\text{TP}] \text{Subj. T}_{[\text{num, per, tense}]} \text{vP}]]$ （1つの主語位置）

以上が与えられると英語史の各時代における使役的 QESC と非使役的 QESC の派生は次のように分析される。まずステージ1では，経験者項が TopP 指定部に移動することで使役的・非使役的 QESC が派生された。TopP 指定部が A バー位置でありつつ数素性[num]との一致が生じる位置であることから，奇態格主語が話題要素と主語の両方の性質を兼ね備えていたことが説明される。また，使役的心理動詞の場合は原因項が TopP 指定部または FinP 指定部に移動することで使役構文が派生された。

ステージ2の時代になると，非使役的 QESC は経験者項が TP 指定部または FinP 指定部（いずれも A 位置）を経由して TopP 指定部（A バー位置）に移動することで QESC が派生された。移動の連鎖が A/A バー位置の両方を占めることから奇態格主語が話題要素と主語の両方の性質を兼ね備えていたことが説明される。他方，使役的心理動詞の場合は経験者項が TP 指定部または FinP 指定部に移動する際に vP 指定部の原因項を越えることになり，移動の局所性制約に違反してしまう。そのためこの時代に使役的 QESC は消失した。

最後にステージ3の時代には，QESC を派生させるために経験者項は TP 指定部に移動しなければならないが，この移動は「音声的に空の要素が主要部となっている XP は EPP を満たすことができない」という制約に違反する(Landau (2007))。そのため非使役的 QESC も最終的に消失した。

4.2 心理動詞の do 挿入への抵抗

本研究では、後期近代英語で動詞移動の消失に抵抗した know, believe, doubt, care と半助動詞 need, dare を対象とした。know, believe, doubt, care の疑問文での主語との相対語順と否定文での否定辞 not との相対語順を Penn Parsed Corpus of Modern British English, 2nd edition (PPCMBE2) で調査した結果をまとめたのが表 1 である。

表 1：後期近代英語における know 類動詞の疑問文と否定文での相対語順

	V > subj.	do > subj.	V > not	not > V
know	10 (4%)	258 (96%)	264 (32%)	557 (68%)
believe	3 (8%)	33 (92%)	36 (36%)	65 (64%)
doubt	0 (0%)	3 (100%)	35 (53%)	31 (47%)
care	1 (33%)	2 (66%)	16 (26%)	46 (46%)

ここから、know 類動詞は後期近代英語では疑問文で主語と倒置する力はほぼ失っていたが、否定文で not に先行する力を依然として維持していたことがわかる。また know 類動詞と比較するため、need と dare についても疑問文での主語との相対語順と否定文での否定辞 not との相対語順を PPCMBE2 で調査した。その結果をまとめたのが表 2 である。

表 2：後期近代英語における need/dare の疑問文と否定文での相対語順

	V > subj.	do > subj.	V > not	not > V
need	11 (85%)	2 (15%)	134 (98%)	3 (2%)
dare	14 (82%)	3 (18%)	47 (82%)	10 (18%)

know 類動詞と異なり、need/dare では疑問文における倒置語順と否定文における V not 語順がともに優勢であったことがわかる。ここから、need/dare は know 類動詞よりもさらに文法化が進んだ段階にあったと思われる。

この調査結果に基づき、本研究では Hopper and Traugott (2003) による文法化のクラインを修正して、半助動詞 need/dare は T の下位にある機能範疇 Mod(ality) を、軽動詞である know 類動詞は VP シェル構造の上位主要部 v を、それぞれ占めていると提案した。図 4 の構造は、V から T へと上位の主要部にいくにしたがって文法化が進行していることを表している。

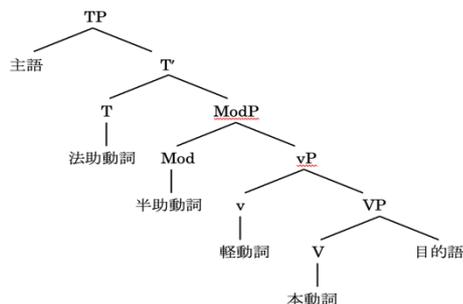


図 4：本動詞から法助動詞への階層構造

より具体的には、know 類動詞は図 5 の(a)から(b)へと、半助動詞 need/dare は図 6 の(a)から(b)へと、それぞれ文法化が進行したと考えられる。本研究では、その分析の妥当性を know 類動詞と半助動詞 need/dare の「頻度」「主観化」「補文構造」の 3 つの観点から裏付けた。

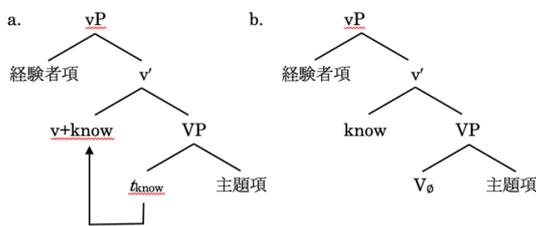


図 5：know 類動詞の文法化

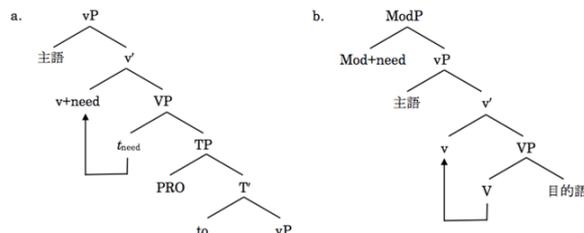


図 6：need/dare の文法化

<引用文献> Belletti, A., and L. Rizzi (1988) "Psych-Verbs and θ -Theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291–352. / Hopper, P. J. and E. C. Traugott (2003) *Grammaticalization*, 2nd ed., Cambridge UP. / Landau, I. (2007) "EPP Extensions," *Linguistic Inquiry* 38, 485–523. / Landau, I. (2010) *The Locative Syntax of Experiencers*, MIT Press. / Miura, A. (2015) *Middle English Verbs of Emotion and Impersonal Constructions: Verb Meaning and Syntax in Diachrony*, Oxford UP. / Möhlig-Falke, R. (2012) *The Early English Impersonal Construction: An Analysis of Verbal and Constructional Meaning*, Oxford UP. / Nawata, H. (2009) "Clausal Architecture and Inflectional Paradigm: The Case of V2 in the History of English," *English Linguistics* 26, 247–283.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Tomio Hirose and Hiroyuki Nawata	4. 巻 28
2. 論文標題 A Finer-Structural Analysis of the Japanese Politeness Morphology	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 79-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 縄田裕幸	4. 巻 54
2. 論文標題 局所的空主語言語としての初期英語とパラメーター階層	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 島根大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 51-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroyuki Nawata	4. 巻 35
2. 論文標題 Quirky Experiencer Subject Constructions as Locative Inversion	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近代英語研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 縄田裕幸	4. 巻 51
2. 論文標題 後期近代英語における残留動詞移動とknow類動詞の文法化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 島根大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 69-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 縄田裕幸
2. 発表標題 初期英語における空主語の認可とパラメター変化
3. 学会等名 日本英文学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tomio Hirose, Hiroyuki Nawata
2. 発表標題 A Finer-Structural Analysis of the Japanese Politeness Morphology
3. 学会等名 The 28th Japanese/Korean Linguistic Conference（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 縄田裕幸
2. 発表標題 所格倒置としての非人称心理動詞構文：英語の通時的発達が明らかにすること
3. 学会等名 第5回史的英語学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 縄田裕幸
2. 発表標題 something型複合不定代名詞の成立に関する一考察
3. 学会等名 言語変化・変異ユニット第5回ワークショップ
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 田中智之・茨木 正志郎・松元 洋介・杉浦 克哉・玉田 貴裕・近藤 亮一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 448
3. 書名 言語の本質を共時的・通時的に探る	

1. 著者名 金澤俊吾・柳朋宏・大谷直輝	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 384
3. 書名 語法と理論との接続をめざして	

1. 著者名 小川芳樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 429
3. 書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 2	

1. 著者名 縄田裕幸・久米祐介・松元洋介・山村崇斗	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 306
3. 書名 前置詞と前置詞句、そして否定	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------